

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.27

浜風会/入会募集中
毎月第1,3木曜日

篠原地区における つづみ・峠の歴史

現在、南海トラフ巨大地震大津波対策のための防潮堤工事が始まっている。完成の暁には堤・峠は一変するだろう。そこでこの機会にこれまでの堤・峠の歴史を振り返ってみよう。

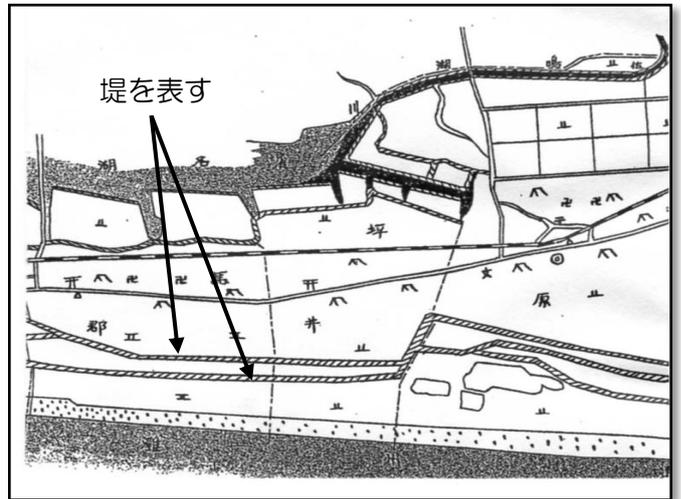
昭和八年発行の土地法典(下図)によれば、篠原地区には一番堤から海に向かって二番堤、三番堤があったが、今は僅かに残っているだけで昔の面影はない。遠州灘海岸地域の堤は、何時の頃、何の目的で築堤されたのか調べてみた。

昔は白い砂地の不毛の地

仁治三年(一四四二)京都から鎌倉に向かった旅人が著した『東関紀行』によれば、舞坂から東海道一帯の情景は、あたり一面白い砂ばかりで所々に松の木と池沼が点在する耕作に不向きな地であったことが想定されると描写されている。

耕地・集落を守るための築堤

江戸時代に新田開発が盛んに行われた五島地区の郷土誌によれば、天正元年(一五七三)頃から海岸林の造成が始まり慶安二年(一六四九)五島地区の開拓が始まったと記されている。又浜松市史蹟調査顕彰会発行の郷土史にも、江戸時代には庄屋が陣頭指揮を執り、砂防のための松を植え、耕地を守ったと記されている。

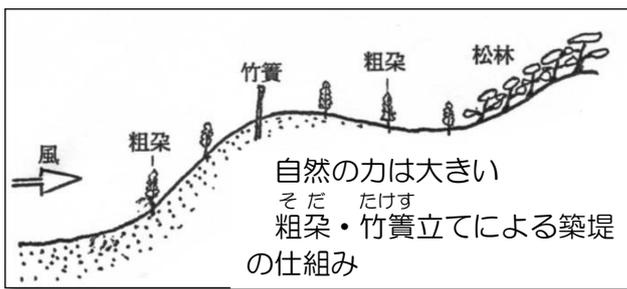


篠原地区の堤は

一番堤が何時出来たかは定かではないが、馬郡・坪井地区の二番堤は安永九年(一七八〇)「長十新田」が開拓され、間もなく「皆汐入」で殆ど荒地となり寛政八年(一七九六)「起返し」で耕地が復旧し、その後新田を守るため南側に「波除土堤」が設置されたと『舞阪町史』に記されている。この堤は馬郡からビーチゴルフ場の西側まで現存している。

大きな浜の峠は

江戸時代の安政年間に地域の村民が松の枝や葎で垣根を作り飛砂防止の工事を行ったと伝えられているが、明治二十三年(一八九〇)



の測図には堤の記号は描かれていない。明治後半から大正にかけて地域住民の冬の年中行事として、粗朶さしや竹簧立て(左図)が行われ築堤されていった。このことは『篠原村誌』の中でも、明治四十三年(一九一〇)より毎年青年会員の力で松葉を挿したことが記されている。

その後、県の事業も加わり昭和四年、七年、二十八年と順次造林事業等が行われ出来上がったのが、北側の峠で、その南側に昭和五十一年から高さ九mの新堤防が築堤された。

今、堤は 峠は

一番堤は昭和三十四年からの土地改良事業に編入され畑となり、三番堤は清掃工場北側の道路となり姿を消した。現存する堤も痩せ細り松の木立ち枯れ、「コ」捨て場等となり未管理状態となっている。

そして現在、浜の峠は津波対策で新防潮堤工事が始まり、形が大きく変貌しつつある。

(藤田博辞)

命山

平成二十六年(二二一四)九月、馬郡町に津波避難タワーが完成しました。鉄骨造り高さ7m、150人が収容出来るそうです。今後必ずやつてくる南海トラフ大地震、大津波に生かすことが出来るはずです。

この考えの元になったものがあります。それは、袋井市にある「大野命山」と「中新田命山」です。

延宝八年(一六八〇)閏八月、江戸時代最大と言われる台風が、東海地方を襲い大きな被害が出ました。浅羽、横須賀地域の記録書「百姓伝記」によると「午前五時頃より風が吹き出し、午前十時頃には高潮が押し寄せ、多くの人馬が死亡。海はしけになり、降る雨は海水のように塩辛く、打寄せる波は大ききく・・・」とあり

ます。この時、江戸時代初期に造られた浅羽大田(おほひら)の堤(つとみ)は各地で大破し、浅羽一面が泥の海になってしまいました。「横須賀根元歴代名鑑」には、「その後中新田、大野、同笠辺の塚山は出来申候由」と避難所の築山が造られたことも記されています。これが現在の「命山」と呼ばれている防災遺跡です。別に「命塚」「助け山」とも呼ばれることもあり、「大野命山」3.5m、頂上面積136㎡。「中新田命山」高さ5m、頂上面積136㎡。どちらも集落の中央にあり、計画的な村づくりを伺うことが出来ます。

更にその後の高潮災害の際には、「村の者供



この山へ登り、一畝日居り、対岸の田町や大工町で食料を揃え、小舟で三番町西の田から漕いで運び助かった」とあります。村人が苦勞して築いた塚山は、何度も村人の命を救い、命塚、命山と呼ばれるようになりました。袋井市は平成二十五年(二〇一三)、平成の命山が完成しました。「湊命山」です。海抜10m、頂上面積1340㎡と大きく、普段は健康の丘として利用するそうです。



浜松市でも、平成二十五年(二〇一四)命山を造りました。「中田島津波避難マウンド」海抜13m、避難面積約1000㎡。「五島地区津波避難マウンド」海抜9m、避難面積約1000㎡です。命山は、五百年とも言われる半永久的な施設で、沢山の人数を収容出来ます。普段は公園として利用できます。しかし広い土地が必要となります。このように、過去の歴史を振り返り、先人たちの智慧に学ぶ動きは各地でみられ、「命山」の存在が見直されています。

(鈴木幹久)

篠原地区の秋祭りの体系概要

町	馬郡町			坪井町		篠原町				
自治	駅前	馬郡		坪井		篠原西				篠原東
祭り組織	春駒	西連	東連	坪井	新田	西脇連	国方連	仲村連	三連	東脇会
氏神様	春日神社 (東連は八幡神社も)			稲荷神社	愛宕神社	西神明神社 (仲村連、三連は八阪神社も)				東神明宮

篠原地区の秋祭り

毎年十月の第二土、日曜日この地区の伝統の秋祭りが行われている。浜風会では昨年メンバーが分担してこの秋祭りを取材した。過日の協働センターまつりで一同に並べ展示したが、各町の祭りの特徴が見られて面白かった。

氏神様の祭り
篠原の祭りはいずれも氏神様の祭り、五穀豊穡、家内安全を祈る祭りである。各町それぞれ祭りの組織の元に伝統の祭りが繰り広げられている。幟はためく神社で神事が行われて後、町内へ繰り出していく。そして所定の行程を回って後、提灯を灯して最高潮に達してお宮へ帰ってくる。

篠原西は御殿屋台
篠原西の祭りは、彫物と赤い幕が自慢の御殿屋台が見ものである。



西神明神社での4台揃っての練り込み



春日神社での3台揃っての練り込

が、大太鼓が屋台の後ろにせりだし、地上に立ってたく点に特徴がある。各連合計四台の御殿屋台が、宮総代の出迎えの中、神社に並んで入る様は美しい。又神社内での太鼓のたたき合いは迫力満点である。
昭和二十三年頃までは、馬郡も御殿屋台だったという話もあるが、現状篠原西以外の屋台は大太鼓(笹屋台とも言うっている)である。
伝統の舞阪の「大太鼓まつり」は、明治以降始まったと聞かがこの篠原の御殿屋台はいつ

頃からだろうか興味が続く。
祭りの変遷と何を残すか
筆者が現役の頃、目にしてきた子供達が綱で屋台を曳く光景や、お囃子の中で目立った存在だった小太鼓は現在では見られない。
そんな中各町とも、祭りに参加する青年が少なくなっている等苦労話が聞かれる。
若者や子供達の生き生きとした姿、腹にどんとくる大太鼓の響きそしてきれいな笛のお囃子等伝統の神事と共に残していきたいものだ。
(山下勝彦)

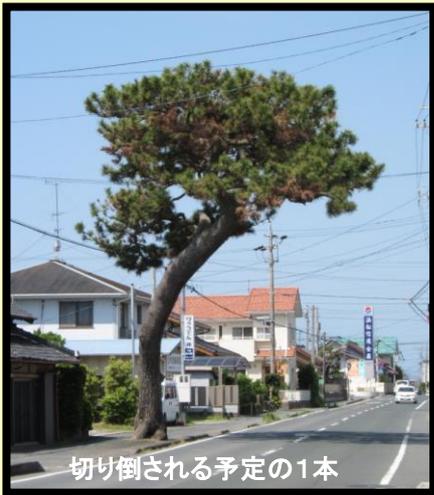
歴史メモ 17

東海道の松 いよいよ1本だけに

篠原小学校の校歌は「東海道の松並木」と歌います。松並木は小学校や東海道を通学する子供たちを見守り、この地区を見守ってきた。

この地区の東海道並木は、東から東山、学校前、坪井新田西そして馬郡の西にあって、19世紀前半の記録では総長は2.6kmもあった。街道の総長は4.6kmであったので、なんと街道の半分以上は松並木であった。また同じ頃の記録に篠原村の松は533本であるとしているので、同じ比率で坪井・馬郡村を含めた本数を計算すると、約1200本あったと推定される。昔は道の両側に松があったが、自動車が通るようになり、北側は伐採されて道路になった。さらに時代が進むにつれて、周辺の住宅化、台風や松くい虫の被害、そして道路の舗装などにより松は次第に減っていった。

現在残っている松は、小学校校門の東側と長里橋の西50mの2本だけである。残念なことに西側の1本はすでに枯れていて、近々に切り倒されるようである。



切り倒される予定の1本

1601年(慶長9)徳川幕府は街道に並木を植樹させることを始め、以来400年以上続いてきた松並木は、いよいよ最後の1本となる。(鈴木 忠)

私の人生、過去・未来

私は、半世紀も前に篠原中学校の三年間、卓球部で過しました。放課後の練習では、卒業生や先輩諸氏の厳しく熱い指導を毎日、それも夜まで受けたことを今では、懐かしく思い出します。その頃の中学校は、市内では小規模でありましたが、部活では水泳、陸上、器楽が立派な成績を挙げていました。

中学校には、他校に自慢できる50mプールがあり、浜名湾水泳大会が開催されました。プール北側に「すべての道は、東京オリンピックに通じる」というような英語で書かれた板が掲げられており、登下校時に仰ぎ見て、辛い練習から逃げたい、辞めたい自分を励ましてくれる

ているようでした。入部当時20名を超えていた同級生もすくすく5名となりましたが、同じ体育館で体育部以上に励む器楽部を目の当りにして、卓球部も続けと歯を食いしばり頑張り続けて、それなりの成績が残せました。

中学・高校を通じて他校の友人から「篠原は何で部活が強いのか?」とよく聞かれて、冗談半分に「タマネギとイモを食っているからじゃん」と答えたものです。中学時代に部活動で育んだ心身は社会人として成長してゆく支えとなり

力強い味方となったと信じています。それに応えて今はありませんが、篠原卓球少年団の立ち上げや運営の手助けをさせてもらいました。話題は趣味に変わりますが、若い頃、内臓に

良いと十数年にわたり師匠について邦楽器で都山流尺八の稽古したことを思い出しました。尺八は「首振り三年、口八年」と言われているようになかなか上達しなかったですが、稽古を重ねた後、各種の演奏会で琴や三味線とピタリと合った時には、清々しく、心身ともに充実感を味わったものです。

最近納屋を改造した練習部屋で尺八に息を吹き込んでいますが、長いブランクのためか安定した音が出せずに奮闘しています。これから稽古を重ねて「春の海」「摘み草」などが吹けるようになりたいものです。

尺八のほか、「お城巡り」、「神社巡り」など、これまでやりたくても出来なかったことを、自分の身体と相談しながら、

浅く広く学び残された人生を有意義に過ごしたいものです。(高柳恒重)

浜風会会報第27号
篠原協働クラブ同好会「浜風会」
(篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)
編集委員 委員長 山下勝彦
鈴木幹久 鈴木忠 藤田博辞
発行責任者 山下勝彦
発行平成27年7月1日
連絡先: 浜松市篠原協働クラブ 気付